佐渡米通信

こめ～る

2025年 2 月号

発行日:2025年2月
発行：佐渡農業協同組合　担当：総務部企画課　駒形(葵)
jasadosoumu02@snow.ocn.ne.jp

R6年度ドローン追肥試験の結果報告

JA佐渡では、品質向上と収量を確保するための後期栄養確保を特に重視しています。昨今の温暖化に加え農家の高齢化が進む中、JA佐渡ではドローン追肥の可能性に着目しR5年度から圃場試験を行っています。R6年度も引き続き、穂が出る前に施用する追肥として高濃度液体肥料をドローンで散布する試験を行いました。今年度は新たにドローン散布時に圃場にブルーシートを被せ、液体肥料が掛からない区画を設け散布した区画との比較を行いました。被覆区と比べ散布区は収量が3~5%増収するという結果が得られました。今後も試験を継続して行っていきます。

ドローン追肥の可能性としては省力化かつ肥料の脱プラスチックに繋がるこれからの米作りに重要な技術です。JA佐渡としても早期の技術確立を目指しています。

試験区の生育調査の様子

佐渡の米農家さんにインタビュー

南佐渡にある赤泊地区川茂地域の農事組合法人かわも代表理事の風間昌平さんと会計担当理事の和泉孝二さんにインタビューさせて頂きました。同法人は2007年に設立した生産組合が基になっており、2019年に法人化しました。朱鷺と暮らす郷認証米と自然栽培米コシヒカリを合わせて16ha作っています。インタビューをするにあたり風間さんが設立の経緯や取り組みをまとめた資料を準備して下さり、丁寧に説明してくれました。説明の各節で和泉さんからもお話があった中で「それぞれの得意分野を活かして助け合いながら活動している」という言葉がありました。代表理事を選出する際には対外的な対応に長けているのではないかということで風間さんが選ばれたそうです。組織を運営していく中で経理、土木、測量、施工、修理、情報技術導入等の農作業以外で必要な技術を持った参加農家の方々を頼もしそうに話すお二人の姿が印象的でした。経営状況も年々上向いているとのことで、集落営農の理想的な運営例のひとつだと思いました。

同法人の自然栽培の田んぼの前には神社があり、毎年2月に行われる御田植え神事では参加農家の方々も豊作祈願としてお祭りに参加し、無形文化の継承にも貢献しているそうです。

代表理事の風間昌平さん(左)と会計担当理事の和泉孝二さん(右)

風間さん曰く「昔は他人の畦を踏んではいけない」とのことだったが、今ではみんなで集落の田んぼを守っている

地域の子供たちも参加する五所神社の御田植え神事

安心なお米を作りたいと約40年前に始めた自然栽培米は、法人化した今も作り続けている

温湯消毒 | 春耕転 | 苗づくり | 田植え | 水管理 | 中干し | 穂肥 | 稲刈り | 秋耕転 | ふゆみずたんぼ

facebook　instagram　JASADOTANBO